

みんなのジュニア生態学講座

～高校生と研究者の交流会～

2025年3月15日（土）16:00～17:30



本郷 峻
地球研・京大

流れるままに保全研究

動物園とテレビの動物番組が好物だった都会育ちの私は、中2の時に聴いたある講演をきっかけに、将来の夢を「動物学者」に定めます。とはいえ、京都に来れば人はダラけるもの。惰眠と弓道をむさぼる自堕落な京大生になり果てていた私は、とある実習でニホンザルの野外観察に出会い、かつての夢だった野生動物研究を思い出すと、悪名高き「人類進化論研究室」のドアを叩きます。そこで、アフリカ熱帯林のマンドリルという「超難敵」の基礎生態学に埋没する、7年半の深遠で幸福な院生ライフを送ることになります。その後、背に腹は代えられぬ博士研究員として、野生動物管理の世界に足を踏み入れます。そこは、小さい頃に夢見ていた、でも研究者になって以降は敬遠してきた「保全」という応用生態学の世界。人類学者や環境社会学者の放つ未知の言葉や思考パターンに翻弄されつつ、熱帯林にひたすら自動撮影カメラを置き続けていました。すると、それら様々なヒトやモノたちと私とが新たに結びつき、共生成されてゆきます。そうやって、ただただ目の前の楽しいことに流され続けていたら、いつの間にかアフリカを飛び出していました。今では南米や東南アジアの熱帯にまで手を広げて、地域の人々と協力しながら「森のお肉を守る」研究をしています。そんな私の気ままな保全研究についてお話します。



木下 千尋
イラストレーター

博士号をとって イラストレーターになった

「生き物が好き」「研究に興味がある」ここに参加する皆さんは、こんな情熱をもつ方が多いのではないのでしょうか。一方で、ゲームやスポーツなど、趣味が多い人もいます。私は、ウミガメ類を対象とした研究で博士号をとりましたが、イラストを描くことも好きでした。調査中に見たり感じたりしたことを、絵に残しておきたいという気持ちが強かったのです。学生の頃は、研究時間を犠牲にして描いていた時期もあり、「お絵かきよりも研究が先」と注意されたこともありました。大学院生として、研究を進め、論文を書くことが最も重要な仕事であることは言うまでもありません。そんな時、ちょっとした転機が訪れます。調査中、研究者以外の方々と緻密にコミュニケーションを取る必要があったのですが、イラストを使って説明するとより早く正確に理解してもらえることに気がついたのです。そこから私は、「コミュニケーションや問題解決の手段としてのイラスト」を意識するようになりました。後に、研究内容を広く伝えるために苦労している研究者が非常に多いことを知りました。博士号取得し研究員として働いた後、今はイラストを通じて、さまざま視点から科学をどう伝えるかを考える仕事をしています。この講演では、やりたいことを一つに絞れずに悩んでいる方々の心が軽くなるようなお話ができればと思います。



松本 哲也
茨城大学

「いきものオタク」は 研究者に向いているか？

小学生のころ、テンナンショウという植物に魅入られてしまいました。ずっとテンナンショウとふれあい続けるには研究者になるしかない、そんな一途な思い込みから博士課程へと進み、度重なる出会いと幸運に恵まれて、今の職にありつきました。何とも嬉しいことに、調べれば調べるほどテンナンショウの繁殖様式は奥深く、解くべきテーマが尽きる気配はありません。では研究者は誰もが〇〇オタクなのかというと、全くそんなことはありません。私の身の回りには、生き物そのものよりも、それらが引き起こす現象や、その背後にある理論に魅せられた研究者が大勢います。むしろ生粋のオタクらしき研究者は（存在感はさておき）数のうえでは少数派かも知れません。現時点で非オタクな研究者志望の方にとっては朗報でしょうか。じゃあオタクな自分は研究者に向いていないのか...と落胆する必要もありません。ただし、生き物を誰よりも愛好する熱意と、研究をコツコツ継続する根気は必ずしも一致しません。研究者を目指し始める前に「ただ〇〇が好きなのか、研究が好きなのか、それとも両方好きなのか」と自問自答してみることはとても重要です。そうして一歩踏み出した皆さんには、〇〇オタクだからこそ〇〇だけに興味を閉じず、無限に広がる研究分野間の繋がりを楽しんでほしいと思います。